

椿つばきの柄のネクタイ。

見間違いではない。錯覚でもない。たしかにあの柄だ。紺地に、手描きの赤い椿。あの時、あの女が淳史あつしのために買ったネクタイ。忘れるはずもない。あの容赦のない赤さ。あのネクタイを締めたら、胸の真ん中に、まるで射抜かれたかのような真つ赤な穴が空くだろうと、あの時思った。

(すべて手描きの一点ものです)

店員はそう言っていた。

(当店のオリジナルで、同じものはふたつありません。これだけです)

そのネクタイを締めた見知らぬ男が、今、二メートルと離れていない場所に立っている。人待ち顔で。

麻子あさこは彼から目を離すことができなかった。

午後六時。地下鉄の改札口を出たところの、小さな広場。

淳史との待ち合わせのとき、麻子はいつもここを使うことにしていた。二人の職場のどちらからか、あまり遠くなく、近すぎもしない手ごろな駅の、手ごろな人込みが便利だったから。

(右から三番目の柱の陰にいるわ)と、電話で言っている。(そっちから見つけてね)

(ちよつと遅れるかもしれないけど、そこを動いちゃ駄目だよ)と、彼は言っていた。

(君は小さいから、すぐ人込みにまぎれちゃうからね)

いくら麻子が小柄だからといっても、探しはぐれるはずもないのに、待ち合わせをするたびに、まるで子供に言い聞かせるかのように、彼はそんなことを言う。

以前、二人で洋画を観みにいった帰り道、こんなことを言ったこともある。

(英語ってのは、いいよね)

(どうして?)

(ほら、人を呼ぶとき、いろいろな言葉を使えるじゃないか。相手が恋人だったら、『ハニー』とか、『スイートハート』とか。『ベイビー』っていうのも聞いたことがあるな。あれって、呼ばれた方もうれいんじゃないかなあ)

麻子は笑って言ったものだ。(わたしは『おチビちゃん』なんて呼ばれたら、怒るからね)

そう。だから、淳史が酔っぱらって（麻子さんは、どうしてそんなに何から何まで小さいのかなあ）などと言ったとき、爪先で蹴飛ばしてやったのだ。

（なんでだよお。小さくて可愛いわ、って言おうと思っただけに）

『何から何まで』ってというのがイヤらしいのよ

思いつくと、今でもおかしくなる。小さい、小さい麻子。のつぽの淳史と並んで歩いていると、本当に彼の腕にぶらさがっているかのように見える麻子。

だけど、わたしたちは良い組合せ。ばらまかれたパズルの、隣り合わせになるべき、正しい断片。

もう間違わない。今度こそ正解。二年も前の、別の男のことは忘れてしまった。

そう思いながらふと目をあげたとき、改札口の脇の公衆電話のそばに、赤い椿の柄のネクタイを締めた男が立っていることに気がついたのだ。

いくつぐらいだろう？ 淳史よりははずっと年長だ。三十代の後半か——四十歳ぐらい？

真っ赤な椿がよく映っているのも、その男の着ているスーツが、地味な銅色だからなのだ。こうして見ると、あのネクタイは、淳史のような若者ではなく、あれぐらいの年齢の男性にぴったりと釣り合うようにできていた……

でも、なぜあの男性があんなネクタイを締めているのだ？

そのとき、深紅の椿の男が、ふと顔をほころばせた。待ち人がやってきたのだ。

改札を抜けて、彼女は小走りにやってきた。約束に遅れてしまつて、あわてながらも、

微笑んでいられるのは、遅刻を笑って許してくれる相手を持たせている女性たちだけの特権。混雑のなかを、笑顔で他人を押し退けながら、彼女たちはこう言っている。ごめんなさい、ごめんなさい、でも、わたしには待っている男がいるものだから——

その女性の顔を見たとき、彼女が誰だかわかったとき、柱にもたれていた麻子は、ピンと背中を伸ばした。

「あの女」だった。

麻子は、思わず彼らに歩み寄った。誰かに引つ張られたかのように、身体が前のめりになつて、近づかずにはいられなかったのだ。

二人の男女は、ほとんど同時に麻子に気がついた。

「あの女」は、ほとんど変わっていないかった。だからすぐにわかったのだ。髪型も化粧も服装も。ほっそりとした仕立てのスーツを着て、きりつとハイヒールを履いている。胸元の開いたブラウスは、光沢のある白色。ダイヤのプチネックレスがきらりと光る。

「三浦さん……」

女も麻子を覚えていた。

一年半ほど前のことになる。

当時の麻子は、八重洲地下街のなかにある小さなコーヒーショップで、ウエイトレスをしていた。

午後一時から夕方六時までのアルバイトである。本当なら働きたくなかったのだが、失業保険の給付も終わってしまったし、両親にも、家にいてふさいでばかりいないで外に出なさいとうるさく言われるので、渋々ついた仕事だった。

あの頃の麻子は、呼吸をし、柔らかな皮膚でおおわれてはいるものの、ただの機械にすぎなかった。胸の奥深くで、歯車が回っていた。

人間が「幸せ」を感じる場所は、きつと心臓だろうと、麻子は思う。「幸せ」な出来事に逢うたびに、鼓動は跳ね上がる。恋人と二人でいるときに動悸が早まるのは、相手の手でそれを確かめてもらうためのものだ。

それなのに――

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。